Crown trick “ ice”

Ninailce

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新生活。アークスとなった私。
幼馴染みで特別な関係なアリスと、
偶然チームで巡りあう４人の女の子との
甘い恋？の物語。
そんな私の日々を記していく。

目　次

コイスルキモチ ―― 1
シエルトキドキハレ ―― 8
シエルトキドキハレ2 ―― 13
ミッツノタイヨウ ―― 17
デート×デート　前編 ―― 21
デート×デート　中編 ―― 27
デート×デート　後編 ―― 31
マリア ―― 37
ユメセカイ ―― 41
氷のように冷たくて ―― 46

コイスルキモチ

春。桜が舞う季節。
私は今、恋をしているらしい。
「……よし」
鏡の前でガッツポーズを決める。
…私ったら、なんで張り切ってるんだろうか…。
「あ、鍵…。…どこいったし…」
相変わらず自分の持ち物管理は出来ない
新生活に慣れていないからか、
それとも単に私が鈍感だからなのか？
身支度を終えて部屋を出る。
玄関先にはきっとあの子がいるんだろう。
「…おっはよー！」
元気に挨拶をする茶髪でみつあみツインの女の子。
いきなり抱きつかれる。
手を背中に回され、顔が私の胸に埋まる。
「アリスちゃん…おはよう…」
キツく締め付けられ硬直する。
同時にアリスの髪のいい匂いが
私の鼻腔を刺激した
「なーに赤くなってるのん？」
得意そうな笑顔で私を見つめる。
「なっ…なんでもないよっ！」
冷静を装うもすぐバレてしまう
アリスが唇を近づける
いつもそう…毎日してること。
「んっ…」
唇が重なる。
「ふふっ…」
彼女は嬉しそうに微笑む。

…朝から何してるんだ私は。
「アリスちゃん？朝から激しいよ…。
また後からしたげるから、今は…ね？」
本当はしたい。めちゃくちゃしたい。
彼女は少し拗ねた口調で
「わかったよぉ…ふーんだ…」
怒ってしまった…？かな…？
「と、とりあえずアリスちゃん！
チームルーム行かないと！会議だよ！」
強引に彼女の腕を掴み走り出す。
「ん…アイスったら…／／／」
なんでこうこの子は強引にすると
照れるのだろうか…。
ーチームルームー
そう言えば自分のことを書き記してなかった
私はアイスって言います。
アークスって言う組織の一員で、
その中のクラウンドロップに所属している。
階級はマネージャー。
日々の仕事は忙しく…息をつく暇もない…
……と、言いたいが仕事はあんまりない。
「ふわぁ…」
欠伸が出る。
ここ数日色々あって寝た気がしていない。
「今日こそ寝なきゃ…」
大きく背伸びした時だった
「!?」
後ろからいきなり抱きつかれる
？「だーれだ？」
誰かは検討ついてる
でもなんとなく意地悪したくなる。

「わかんないなぁー」
今思えば子供っぽかったかもしれない
「えーそんなー…ひどいよー…」
ぴょこんと私の目の前に出てくる。
今日はフリルのメイド服に猫耳か…
正直可愛いくて目を合わせられない
「しえるちゃん、会議そろそろ始まるから
資料持ってきなさい？」
しえるはスカートをふわっと浮かせ
軽やかに一回転した。
「しょうがにゃいにゃあ…」
鼻歌を楽しそうに奏でながら、
資料を取りに戻っていった。
「…パンツはいてなかった…よね…」
イケナイ部分を見てしまった。
ふと昨日の夜のことを思い出して赤面する。
「何考えてるのよ…私。」
そんな赤裸々なことを考えていたら
いつの間にかチームメンバーが入ってきた。
ノエル「アイスさん、おはよ。」
薄い茶髪のショートヘアーに
和服を着た可愛い女の子。
この人こそ、クラウンドロップのマスターであり
尊敬する人でもある。
メア「おは…」
白い髪に綺麗な肌。
純白の制服を好んでよく着ている女の子。
しえる「おはにゃー」
さっきいきなり抱きついてきた女の子。
さっきから私を見て微笑んでいる。可愛い。
マリア「おーはよ」

大人そうで外見ロリっぽい女の子。
今日は何故か”ちゃんとした”服装をしている。
「あれ、アリスちゃんは？」
ノエルが辺りを見回しながら首を傾げる。
「おかしいな。一緒に来たんだけど…」
私と一緒来たハズだが確かにいない
どうせトイレだろう。
そう思って探しに行くことにした。
「まだ会議まで時間あるよね？
私、探してくるよ」
チームルームを出てロビーへ出る。
発信タグからアリスを呼び出したが出ない。
「やっぱトイレかな？」
トイレとなるとショップエリア二階の奥だ。
少し小走りでトイレへむかう。
「これ、私が漏らしそうなのかなって
思われないかな…」
無駄な心配をしつつトイレへ到着。
普段ここは使われないらしいから
いつも綺麗だ。
「ん…？」
奥の個室が使用中になってる。
もしかしてアリスなのかな…。
違ったらどうしよと思いつつノックする。
？「ひゃい!!?」
…アリスの声じゃん。
「アリス…会議始まるよ。
さぼってないで出てきなさい。」
全く、何してるんだか…
「いや…あのね…、
ちょっとお腹痛いの…。」

アリスは苦しそうな声で訴えていた。
もしかして、本当にやばいのでは？
不安と心配がどっと押し寄せる。
「大丈夫!?開けて？」
個室のロックが
赤から青に変わった瞬間だった。
「…え？」
中に引き寄せられる。
アリスが満面の笑みで抱きついてくる
「昨日の夜のこと思い出してさ、
独りでしてたの…／／／」
頬を赤らめ抱きついてくるアリス
私の下半身へ手を伸ばす。
「だっ駄目だよ…んっ…／／」
いきなり個室に引き込まれて、
いきなり恥部に触れられている。
「会議…あっ…あるんっんんっ／／
あっ…やっ…／／／やめてっ…んあっ／／／」
なんでこんなことになったのか検討つかない。
ただ、いやらしい音と
私の激しい吐息が拡がっていくだけだった。
「アイスちゃん…大好き」
キスをされる。舌が私の中で暴れる。
「んっ…ちゅる……ちゅるる…」
唾液が漏れる。
口がべとべとになっていく。
それでも私達はこの行為をやめなかった。
「ふわぁ…」
やっとアリスが唇を放す。
目がとろっとしていて可愛い。
「アリスちゃん…もう会議だから戻ろう？ね？」

それでも彼女は私の恥部に指を入れる。
「ばかっ／／／／　やだそこっ…イっちゃう／／／／」
体の奥底から這い上がってくる快感。
アリスの指が私の蜜壺を押し上げる。
…私…ほんとにイッちゃうんじゃ…
!!大きな声を出して果てそうになるその時だった。
!!!ノエル「アイスさーん、アリスー？いるー？」
「!!!」
!!!立っていられない程の快感が私を襲う
!!アリスはそこだ！と言わんばかりに
また私の蜜壺に刺激を与える。
声が出てしまう。
また快楽の波に包まれてしまう。
ノエルにバレてしまう…。
必死に耐えるも限界が近づく。
「イッ…ちゃ…う…／／／／」
声が出るか出ないかの間際で
アリスが私の口を唇で塞ぐ。
「ーーーー!!!」
２回目の絶頂。
外にはノエルがいるのに
そう考えた途端恥ずかしさが一気に表に出る。
「いや…出ちゃ……う……」
私はアリスの手に向けて
ほんのり黄色い液体をかけてしまう。
「／／／／／／／／／／」
私は恥ずかしさのあまり両手で顔を隠した。
「アイス…可愛い／／／」
アリスが私の手を退けて頬に軽くキスをする。
「ノエル、行ったみたいだよ」
アリスがそっと耳元で囁く。

「行ったじゃないよ…バレたらどうすんの…
ばか…。ばかぁ…。」
若干申し訳なさそうにアリスがこっちを見てきた。
…こんな顔されたら怒れないじゃん…。
「あたしにも…して？」
アリスが自分の恥部を
私に弄って欲しいと言わんばかりに差し出す。
「こりゃ会議遅刻コースかな…」

その後、私とアリスは仲良く叱られましたとさ。

続く

シエルトキドキハレ

「はぁ…」
深くため息をつく。
昨日もあの後、深夜まで
アリスとシてしまった。
「…シーツぐちょぐちょだったし…
私どんだけよ…」
洗濯したシーツを干し、一息いれる。
「珈琲でも飲もうかな」
戸棚にしまってある瓶を取りだし、
お気に入りのマグカップに粉を入れる。
「そういやこの珈琲、アリスのか…」
彼女は珈琲が大好きでいつどこでも飲む。
特にブラックが好きらしい。
「私はブラック苦手だけどね…」
ほどよい温度のお湯を注ぎ
角砂糖とミルクをたっぷり入れる。
「ん…おいし。」
すぅーっと心が安らぐ。
休日はいいものだ。
「そういや掃除してなかったし
しちゃおっかな。」
飲んだマグカップを台所へ持っていく。
と、同時にチャイムがなった。
「誰だろ…」
玄関の覗き窓からそっと覗く
「…しえるちゃんか」
ドアを開けるとすかさず飛び付いてきた
「やっはろー!アイスちゃん!
遊びきたよー!にゃんにゃん♪」

今日はメイド服じゃないけど
かなり短いスカートか…
「ねぇしえるちゃん？
下着、はかないの？」
しえるはゆっくりと靴を脱ぎながら
こちらに首をむける。
「だって邪魔じゃん？」
この子もう駄目ね。
羞恥心がない。
「だからってはかないのは駄目。
女の子なんだから、ちゃんとして。」
キツく言うと拗ねるのは
どっかの誰かと同じなのか。
しえるはムッとした表情で
「わかったよー…今度からはくぅ～」
生返事だが承諾してくれた。
「ところでどしたの。
寂しくて来たのかな？」
しえるをリビングに通し、
大好物のオレンジジュースを出してあげる。
「んー、そんなとこ」
ジュースに夢中になってるし…
「ねーアイスちゃん」
「ん、なに？」
「アリスとえっち気持ちいい？」
一緒に飲んでたオレンジジュースを
吹き出した。
「アイスちゃんｗｗｗｗｗ
もう服濡れちゃったよぉｗ」
吹き出したオレンジジュースは
しえるの服にかかってしまった。

いや、それよりなんでバレてるのか。
「と、とりあえず替えの服…
私の持ってくるから!!」
慌てて席を立とうとした時だった
不意に腕を掴まれる。
「え、どしたの？」
頬を赤らめながら
しえるは口を開く
「体べとべとになったから
お風呂入ろ？」
突然の申し出に戸惑う私
「えっ!?ええっ!?
おっお風呂？お風呂!?」
裸の付き合いとか
アリスともしてないのに
「だめ？」
涙目になってるしえるを見ると
断れなくなってくる。
まぁ女の子同士だし多少は
…多少は…大丈夫。
「って、しえるちゃんもう全裸!?」
ふと目がいくのは下半身。
毛がない。綺麗な恥部。
「アイスちゃんもぬごー！」
強引に脱がされる。
「ちょっ…／／まっ…／／」
そのままお風呂場へ直行する。
「しゃわーしゃわー♪」
しえるが私に冷たいままの
水をかける。かなり冷たい。
「ひゃあっ／／／」

変な声出たし…
「アイスちゃんかーわいい♪」
ご機嫌そうでよかったです。
偶然にも朝お風呂に浸かっていた為
湯船に溜まったお湯はまだ温かい。
「きもちーねー！」
「う、うん…」
やっぱり下半身に目がいく。
私ってやっぱ変態なのか。
少し眠くなってきた。
うとうとしかける。
その時ふと唇に柔らかい感触を感じる。
「!?」
キスをされた。
しえるに。
「アイスちゃん好き」
しえるはまたキスをしてくる。
なんでだろう、拒めない。
「だっだめ…女の子同士で…」
「でもアリスとは毎日してるんでしょ？
ずるいよー。」
なんで知ってるのか
聞くにも聞けない程責められる。
「ぷはぁ…」
満足そうに私を見つめる。
「ベットで…したいなぁ？」
上目遣いで誘われる。
ずるい。そっちこそずるい。
「でも駄目…」
断るしか出来ない
「アリスちゃん好きなの？」

図星だ。
静かに頷く。
しえるはちょっと間をおいて
ゆっくりと耳元で囁く。
「じゃあ、しえるも愛して？」
心臓がはちきれそうになる。
ドキドキが止まらない。
あぁ目眩がする。
のぼせそう…
そう思った瞬間
私の意識はそこで途切れた。

続く

シエルトキドキハレ2

「ん…」
目を覚ますとベットの上だった。
どうやらのぼせてしまったらしい。
恥ずかしいけどしえるに謝らないと
そう思って体を起こすと
下半身に異変を感じる。
「ちゅぱ…じゅるるる…んえ?
おはよーあいしゅー!」
しえるが私の恥部を舐めまわしていた
「ーーー!?!!」
その事実を目で捉えると同時に
快楽が脊髄を伝ってくる。
「ちょっとしえるちゃっ///
あっ…だめっ…だってばぁ///」
それでもしえるはやめてくれない
のぼせから復帰したばかりの体を
快楽で癒していく。
別の言い方をすれば
”のぼせてるのを忘れるぐらい気持ちいい”
なのだろうか。
「ねーアイスちゃんー
私のもなめて!」
いきなり目の前に小さなお尻が現れる。
視線は大事な所へ向いてしまう。
何もないまっさらな割れ目。
ふとアリスを思い出す。
罪悪感。
アリスにバレたらどうしよう。
ネガティブになってしまう。

そんな気持ちの変化を
しえるは見逃さなかった。
「今アリスちゃんのこと考えたね？」
「…なんでわかるのさ」
正直驚く。そして言の葉となって
しえるへと返す。
「アリスちゃんのことなら
なんでも知ってるよ」
しえるの口から
飛んでもないことを聞いた気がした。
「それってどういう…あっ／／／」
しえるはさらに奥へと舌を入れる。
唾液を滴らせ潤滑させる。
いやらしい音とともに
熱い吐息が私を刺激する。
「んっ／／あっ／／だめ…
しえるちゃん…、そこっ／／／だめっ／／／」
抵抗すればするほど快楽が
体を支配していくのがわかる。
「私だって…負けてられない…んっ／／／」
しえるちゃんの幼く見えるあそこに
舌を滑らせる。ゆっくりと、慎重に。
「ひゃあああああああああ!!」
いきなりしえるが体を仰け反らせる。
腰がヒクヒクし始めた。
「もしかして…イッた？」
この一言がしえるを
本気にさせたのかも知れない。
「うるしゃい！
アイスなんかこうだ！ばかぁ!!」
指で突起を責められる。

「あっ／／／ばっ／／
そこ弱いからっ…だめっ!!」
下半身に熱いものが降りてくる。
さっきのんだ珈琲のせいで尿意が…
「でひゃ…んっくっ…やぁ…だぁ…」
尿意なのかよくわからない
感覚は敏感になり
自然と目の前の
可愛いしえるの大事な部分へ
唇が吸い寄せられる。
触れると同時に
しえるがまた体を反らす。
「あいすぅ…やぁ…
やぁ…なのぉ／／／」
お互い限界に近付いた瞬間だった。
「えっ…あっ…やぁあああああ!!」
私はしえるの顔めがけて
お漏らしをしてしまう。
と同時にしえるの恥部から
大量の液体がぱしゃぱしゃと顔にかかる。
「ふにゃあああああああ!!!」
しえるは絶叫し果てる。
まるで子猫のように。
「ふえぇ…／／／」
お互い体を横にずらし
力尽きたように大の字になる。
激しい息遣いだけが部屋を飛び交う。
「もう、ばっかじゃないの…」
私がそう言うと
しえるは這いながら
私の体へ覆い被さる。

唇と唇が触れあう。
もっと激しく。
さっきよりも、もっと。
「あいすぅちゃぁんえーっち♪」
しえるが私の胸に触れる。
正確には突起に触れる。
「今、だめ、お願い、だめ。」
今いじられたら
それだけでイきそう
「もー、しょうがないにゃあ♪」
と言ってまたキス。
頬にも、額にも、首筋にも。
「しえるちゃん可愛い…よ？」
なにいってるんだ私は。
しえるに毒されたのか？
「そろそろ来る頃かなー…」
急にしんみりとした表情を浮かべる
「え、どうしたの？」
心配したその時だった。
「いいなー二人とも。私もまーぜて？」
そこにいたのはアリスだった。

続く

ミッツノタイヨウ

「あ…アリス…その…えっと…」
言葉が出てこない。
と言うか私、
なんて言い訳したらいいか考えてる。
その時点で罪悪感が胸を締め付ける。
謝らないと…
口を開こうとした時
アリスがそれを遮る。
「2人ともこんなシーツ汚しちゃってー
よっぽど満足したのね？（暗黒微笑）」
アリスはしえるの頬を両手で触れる。
「あっ…ありす？」
そのままアリスはしえるの唇へ…
「えっ…」
私は驚愕した。
私の好きなアリスがしえるとキスをした。
頭が真っ白になる。
なんで？
なんでこんなに心が重く感じるんだろう。
「2人とも、そういう関係だったの…」
自然と涙が頬をつたっていくのがわかった。
私は今ショックを受けている。
よくよく考えれば私が悪い。
しえると”こんな事”しておいてショックなんて
『私、最低だ…』
胸が締め付けられる。痛い。
「ありすちゃん、アイス泣いてる…」
しえるが私の異変に気付く。
同時に私は必死に涙を拭う。

「アイスちゃん、
もしかして私に嫉妬してる？」
首をかしげたアリス。
ちょっとだけ寂しそうな顔をする。
「いや、だから…その…、
アリス、ごめんなさい。」
ベットで全裸で正座をする私。
なんだか恥ずかしいし、凄く惨めだ。
「？」
アリスはまたも首をかしげる。
許しては貰えないのはわかってる、
けど、けど…
「ねーアイスちゃん？」
今度は私の頬を両手で包む。
アリスの手、あったかい。
「な、なに…？」
困惑した表情してたと思う。
でもそれを打ち消すように
にっこりとアリスが微笑んだ。
「しえるもアイスが好きなんだよ
だからさ……。」
一言溜める。
次に来る言葉が
予想出来なくて怖かった。
だが、出てきた言葉は

「3人で赤ちゃん作ろ？」

「!?!?!?!?!?!?!?!?」
思わず跳び跳ねる。
しえるとアリスは顔を赤らめて
こっちを見ている。
なんだこれ…、この状況でも
可愛くてキュンっと来る現象どうにかして。
「女の子同士では赤ちゃん出来ないよ…」
何故か正論を言う私、
「しえる、がんばるから…つくろ?」
指を口にくわえて迫るしえる。
「よいしょ…っと」
アリスは服を脱いでいる…
服を脱いでいる!?
「ちょっと…とも2人のとも…
まさか本当に…」
赤ちゃんを作ろうと言うのか…、
冗談…だよな…。
アリス・しえる「赤ちゃん作ろ!」
私に飛びついて来る。
「ちょ…／／／まっ2人とも…／／／／」

…今日は休日だったけど
そうもいかなくなったみたいです…。
「いやぁぁぁぁあああああああ／／／／／」

―深夜―
ベットの両端で
全裸の女の子が寝ている

あれから6時間近く色々なことを…
色々…な…こと…
「(言葉に出来ない程赤面し縮こまる)」
「なんかよくわからないけど…
可愛いからいっか。」
私の名前はアイス。職業はアークス。
なんと、彼女が増えました。
続く

デート×デート　前編

暇とは急に襲ってくるものだ。
「……うーん」
ここ最近平和で何もすることがない。
マネージャーの仕事も数日前に終わっていた。
「明日も1日オフか…」
チームルームには誰も居らず
静かな時間が流れていく。
アリス達はまだ来ないのだろうか？
しえるちゃんも来ないかな…？
頭の中で2人を思い浮かべる。
「……／／／」
数日前に”子作り”と称した行為をしたのだ。
思い出せば破廉恥極まりない。
「私もはっちゃけてたしなぁ…」
赤ちゃんなど出来る訳もないのに
”その”行為をしたのはやっぱり…
「鮮明に残ります。よね…」
…しえるとあんな行為をしてて
何故アリスは怒らなかったんだろうか。
不思議でしょうがない。
「…はぁ」
考え事はいつもため息ばっかり出る。
普通の女の子でいたいのに、
中身はこんな…
自分で発言しようとして
手で抑える。
「…私の変態ばか。」
誰も居ないから余計恥ずかしい。
机に突っ伏して軽く脚を伸ばした。

「ねっむ…」
うとうとしかけた時だった
発信タグの着信音が鳴る。
慌てて飛び起きる。
「ひゃいうっ!アイスでし!!」
盛大に噛んでしまう。
端末を持ったまま赤くなってしまった。
「あっはっはっはｗｗ
アイスｗｗかっわいいｗｗｗ」
電話の相手がアリスだったのが救いでした。
一息おいて冷静になる。
「こほん…え、えっと何か用?」
受話器の向こうでは
アリスが吹き出しながら話始める。
「あのねｗ
明日暇ならデートしない?ｗ」
デート!
こういうイベントは大好きで
つい飛び付いてしまう。
「いいよ。いくいく。」
快諾すると受話器の向こうから
もう1人の声が聞こえる
「ねーあいすちゃーん
しえるもいきたーい!」
案の定しえるも同行するようだ。
…嬉しいけどなんか複雑な気持ち。
「じゃあ明日いつもの喫茶店に!」
機嫌がいいのか声が弾むアリス。
なんだか嬉しい気もする。
「時間は?」
「１０時で!」

アリスとの通話を切る。
椅子の背もたれに寄りかかり天井を見る。
「ふふっ…」
変な笑い声が出る
にやけてる自分が恥ずかしかった。
そう言えば、女の子3人でお出かけってのも
今までしたことない。
「あ、あったわ…」
以前アリスの妹さんと
買い物に行ったことがあった。
確か私の胸が大きくなったのと
妹さんの胸が大きくなった時期が被って
「どーせなら一緒にいこー！」
ってアリスに誘われたんだっけ…
「てか、妹さん元気かな…」
かれこれ半年会ってない。
第4帝都の研究所にいるって聞いたけど…
「どこだかわかんないしなー」
アリス本人に聞くって考えもあったが
最近妹の話をしてこないってことは
何か訳があるんだろう。
「詮索はまた今度にしよ」
自分の中で区切りをつける。
余計なこと…ではないけど、
今は明日のことを考えよう。
「服…買ってこようかな。」
オシャレ。
私があまり好きじゃない言葉。
「デートってことは…夜も…」
いやらしいことを考えて赤面。
私ってこんないやらしい女だったのね…

「…下着…可愛いの買おう…」
ましてデートの相手は
コーデにうるさい2人だし…
「思い立ったらすぐ行動。よし！」
荷物を纏めてチームルームを出る。

”この時もう少し早く出ていれば”
”もっと早くあの子を気づけていれば”
”私はあの子を救えたかも知れない”

―商店街―
オラクルにも買い物出来る施設が
いくつかある。
メインストリートから外れた先
第3帝都には、大きなショピングセンターがある。
「久し振りに来たけど迷うなここ」
いつもビジフォンで購入してる私。
まるでニートが大都会に
5年ぶりに出たような気分。
「言い過ぎかw」
目的のランジェリーショップを探す。
なんだかこういうお店を捜すのすら
とっても恥ずかしい。
「可愛らしい店って聞いたけど…」
それっぽいお店を見つけた。
ピンクの装飾に派手なイルミネーション。
夜なら目立つだろう。

「入るのなんかドキドキする…」
恐る恐る扉を開ける
『いらっしゃいませー』
店員の挨拶とともに店内の光景が
勢いよく目に写る。
「うわぁ…可愛い…」
黒い下着。
ピンクのリボンがついていてとても…
「アリスに似合いそう（）」
自分には似合わない…かな
諦めつつ店内を見回す。
「白か…」
やっぱり行き着く先は白い下着。
清潔感があって好き。
「これにするか…」
白い純白の下着を購入。
思えばこれはいていくのはいいけど
染みとか心配してしまう。
「濡れやすいし…」
ってこんなとこで何考えてるんだ私！
あぁ！もう！調子狂うなぁ!!
会計を済ましてお店を出る。
いつの間にか夕方だった。
「服買う時間ないな…」
今日はそろそろ帰ろう。
駅に行かないと…
そう思い歩きだそうとした時だった。
「久し振り、アイスお姉ちゃん」
…赤い髪。

みつあみであの子にそっくりな
あの子がそこにいた。

「妹…ちゃん？」

中編へ続く。

デート×デート　中編

赤い髪。みつあみ。
アリスにそっくりな妹がそこにいた。
「半年ぶり…かな？妹ちゃん。」
少し控えめに話しかける。
妹ちゃんは姉とは違って少し怖い。
「…」
妹ちゃんはゆっくり歩み寄ってくる。
少し怖い雰囲気があった。
「妹…ちゃん？」
妹の目付きが次第に悪くなる。
その刹那だった。
「…!?」
私の頬から血が出る。
妹は不気味に笑いながら
小さいナイフを右手に持ち胸元まで
入り込んでくる。
『このままだと…殺られるっ！』
必死に身を捻り”その攻撃”を避けた。
…つもりだった。
直後廻し蹴りが躯に当たる。
「くっ…あっ…!!」
壁際に飛ばされる。
「…!?」
おかしい。
街中なのに急に周りに人がいなくなった。
「アイスお姉ちゃんタフだな」
妹が近付いてくる。
訳がわからないけど早く逃げなくては…！
逃げる体勢をした時だった。

…妹が銃をむける。
ヤスミノコフ９０００Ｍ!?
街への持ち出しは禁止のはずなのに!?
驚くのはそれだけじゃなかった。
本来両手で持つハズのヤスミノコフは
片方…一挺しかなかったのである。
「違法改造…!?」
アリスはセーフティを外し
私に銃口をむける。
「逃げられないね…
アイスお姉ちゃん?」
本気でやばい。
目を瞑る。怖い。
『アリス…助けて!』
心で叫んだと同時に

銃声が鳴り響いた。

「…え?」
死んでない。痛くもない。
恐る恐る目を開く、
《……。》
白いキャスト?
白いボディの女性キャストがそこにいた。

「なんで、邪魔したのレギンレイヴ」
妹が鋭い目付きで
目の前の女性を見る。
《命令、されてないだろ。》
機械的な声で喋り始める。
《しかもここは第3帝都だ。
私達が来るとこじゃない。》
そう言うと私を見る。
意外と優しい表情をしていた。
《すまない。貴女を殺すつもりはなかった。》
いきなり何を言ってるのか。
わかるはずもなかった。
「あの…これはどういう…」
真実を聞こうとしたが遮られる。
《すまない、謝罪は後にさせてくれ。》
それだけ言い残すと
レギンレイヴと言う女性は
妹を引っ張り姿を消した。
去り際に妹が悲しげな顔をしたのを
私は見てしまった。
「いったいなんなの…」
2人が姿を消した瞬間
街中の活気が戻る。
…まるで今まで時が止まっていたかのように。

「あれ、体痛くない…」
傷も癒えていた。
勿論頬の傷も…。

”私はここであの子を見た”

”明日のデートで言うべきか”
”言わないべきか”
”これは本当の出来事なのか”

放心状態となりつつあった私を
時計塔の鐘が正気にさせる。
「帰らなきゃ…」
私は家へと急いだ。

後編へ続く

デート×デート　後編

「なんで…」
家へ帰ろうと駅まで歩くが
一向に”駅に辿り着けない”
「こんなこと…あるわけない！」
私は突然の状況に混乱していた。
状況を整理しよう。
いつだって冷静に思考できるのが
私の長所なんだから。
「そうだ、発信タグでアリスに連絡…」
端末を開いて目を疑う。
「大都会なのに圏外…？」
おかしい。
いくらなんでもこれはおかしすぎる。
「じゃあ緊急用のチーム発信タグ…」
ノエルに連絡する用の端末だ。
これなら専用回線だし繋がるハズ。
「ノエルです…
ただいま出ることが出来ません。」
運が悪く不在だった。
なんてツイてない日だろう。
「どうすんのよ…これ…」
帰らなければ勿論…
明日のデートには行けない。
それどころか命の危険もあるかも知れない。
さっきの妹との出来事を思い出す。
「本当に妹ちゃんだったよね…」
今でも信じられない、
夢でも見ていたんじゃないかとさえ思う。
「いいからこの状況

なんとかしないと…」
さっきから同じとこを歩いている気がする。
地図アプリでしっかりたどってるハズなのに。
第３帝都から船団への移送ケーブル。
乗り場は駅のハズなのに…
困り果てた時後ろから声がする。
《先程は御迷惑をかけました》
白いボディのキャスト…
「レギンレイヴ…さん？」
記憶を頼りに確認する。
レギンレイヴはゆっくり頷き
私の隣へ歩み寄る。
《帰れないんでしょう？》
なんで知ってるんだこの人…
ゆっくり目をこちらにむけると
表情を崩さず話始める。
《大丈夫です。
ちょっと違反者がいたので
この辺の地形を書き換えて追いつめて
いただけですから。》
全く意味がわからなかった。
「そんなこと、
普通は出来ないハズです。
貴女達は何者…？」
率直な質問。疑問。
多分答えてくれないとは思ったが
その予想は大きく外れた。
《研究所出身。汚れ仕事してる。》
研究所…
前にアリスも同じことを言っていた気がする。
《アリスの双子の妹が

なんで私に襲ってきたのか。》
タイミングがいい。
聞きたいことを答えてくれそうだ。
「気になるのはそこです。」
《いいけど、くだらないよ。》
くだらない…？
いやいや、命かかってるんだから
そんな一言で返されても困るワケだが…
「教えてください。気になります。」
レギンレイヴの手を握る。
何故かレギンレイヴは頬を赤らめた。
《え!?いや…貴女…、その、
アリスの姉と結婚するんでしょ？》
「は!?!?!?!?」
いきなり何をいい始めたかと思えば
まじでなに言ってるんだこの人。
《その、それで結婚するなら、
それに相応しいかって妹が…ね…。》
つまり要約すると
妹さんが嫉妬したと言うことか…
「だからってあんな野蛮なこと…
違法なこともしてましたし…。」
あとめっちゃ怖かったし（ブチギレ）
《それについては本当にごめんなさい》
レギンレイヴはぺこっと頭を下げた
《お詫びと言ってはなんですが…》
封筒を渡される。
《明日、うちの妹ともデートいくんですよね》
「え、あっはい…って、え?」
レギンレイヴの妹??
明日デート行くのはアリスとしぇる…

「え、しえるの姉!?」
驚いた。世界は本当に狭い。
《はい、血は繋がってませんけど…》
控えめな言動。
何か訳がありそう。
…聞かない方がいいかな…。
「で、この封筒は…」
レギンレイヴは
開けていいよ的な手振りをした。
恐る恐る開けてみると…
「オラクル展示会…招待券…?」
第1帝都でやってる展示会
新作の武器などが展示されたり
古来の文化を学べる施設だ。
《しえる行きたがってたので…》
悲しそうな顔をするレギンレイヴ。
『あ、ありがとう。
3人で行くことにするよ。』
笑顔をむけるとレギンレイヴも
笑顔で返してくれた。
なんか可愛い。
《では、私はこれで…
駅にはここ真っ直ぐ行けばつきますよ》
そういうと彼女はテレポーターを起動した。
「あっ、待って!!」
慌てて呼び止める。
聞かないといけないことがあった。
「貴女のこと、なんてよべばいい?」
レギンレイヴは
ちょっと困った顔をしたが笑顔で
《レギって呼んでください。》

そう言うとスッと消えた。
「行っちゃった…」
他にも聞きたいことがあるが
しょうがない。
「おうち、帰ろう。」

レギに言われた通りに真っ直ぐ進むと
駅があった。
「はぁ…よかった。」
やっと家に帰れる。
私は安堵して電車に乗った。

―自宅―
「え…なんでいるん（真顔）」
家に帰るとアリスとしえるがベットで
遊んでいる。
正確には”全裸で重なっている”
「おーかーりーアイスー」
「おかにゃー」
「おかにゃーじゃないよ!
シーツまたぐしょぐしょじゃん!?」
私のベットがまたぐしょぐしょに…
ってか明日デート行くのに
何故私の家にいるのか。
「明日デート…じゃなかったの…?」

すると2人は口を合わせて
「デート前にえっちでしょ!!」
深くため息をつく。
今日散々な目にあったけど
ここで発散出来そうだ。
「じゃあ今日は2人に
失神して貰おうかしら…?」
アリス&しえる「え”?」

「ちょ／／／まっ…やぁ／／／
あいすぅ…イッちゃうよおぉぉおおお／／／／」
「ふにゃああ／／／
あいすのゆび…／／／気持ちいいにゃあああ／／／」

…当然デートになんか行ける訳なく、
翌日の朝から腰痛になる私でした。
「オラクル展示会は…明後日いこっか…」
「そうね…」
「そうするにゃあ…」

続く。

マリア

「風邪…ですか…。」
マリアが頬を赤らめながら頷く。
「んで、私の家に来たと…」
マリアは首をふるふる縦に震わせる。
どうやら立ってるのも辛いらしい。
「わたし…1人暮らしで…
看病してくれそうな人…居なくて…」
ちょっとかすれた声でマリアは続ける
しかし、私はそれを遮る。
「いいからマリア、部屋入って。
辛いでしょ？」
マリアはこくりと力なく頷くと
靴を脱ごうと玄関に座ろうとした。
が、目眩がしたのだろう。
足がもつれて、私の方へ倒れこむ。
「危ないよマリア…」
一言注意すると、とろんとした目で
”ごめん”と伝えてくる。
「よいしょ…っと」
マリアをお姫様抱っこして寝室まで運ぶ。
ゆっくり寝かせると汗で濡れた衣服を脱がせて
私の寝間着を着させる。
「スタイル…いいよな」
思わずに言葉に出てしまい。
ハッと我に帰ってマリアを見る。
「……すー…すー……」
寝てしまっていた。
「よかった…じゃなくて！
かけるものもってこなきゃ…！」

昨日アリスと一緒に
くるまって寝ていた毛布しかなく
それをかけてあげる。
「すごい熱…」
マリアは尋常じゃない汗をかき
苦しそうな息をし始める。
「なんか薬ないかな…」
市販薬しかあらず、ちゃんとしたお薬はない。
気休めでも熱を下げる薬を飲ませることに。
「マリア…口開けてー」
寝ているマリアを少し起こし
呼び掛ける。
マリアはとろんとした目をまた
こちらに向ける。
「マリア、お薬。あーんしてー」
もう一度マリアに促すと
「…ちゅっ」

マリアにキスをされたのである。
アイス「へ!?」
しかし状況は変わらず
今度は舌を絡ませられる。
「んちゅぅる…ちゅ…」
熱のせいでマリアはおかしくなったのだろう。
そう自分に言い聞かせ、体を引き離す。
マリアの目はさっき以上にとろんとしていた。
「…マリア?寝ぼけてるの?」
何事もなかったように接する。
「アイス…キスして…」
またキスされる。今度は深く長い。

「もっとぉ…」
　またキス。
「もっともっとぉ…」
　また。
「ふわぁ…ちゅるぅ……ちゅ…」
　なんで私拒否出来ないんだろ。
　私より年上のマリアが凄く幼く見えて
　…正直ドキッとしてしまう。
　先日のしえるちゃん見たいに求めたりは
　しないだろうし、マリアは大人だし…
　きっと高熱で苦しくて寂しくて
　してきたんだよね…。そう言い聞かせた。
　そう言い聞かせたはいいものの
　マリアは一向にキスをやめない。
　それどころか激しさを増す。
　唾液が流れ込む。
　なんか違う。正確にはお互いの唾液を
　交換している。
　…そういやマリア病人じゃ……。
　ふと思い出した時、マリアがスッと
　下着をずり下ろす。
「マ…マリア…これって…」
　そこには鋭い振動と刺激を与える
　ピンクの小さい機械があった。
「これ…風邪なのにつけたらぁ…
　ふらふらになっちゃ…てぇ…／／」
　つまり風邪気味なのに1人でしようとしたら
　悪化してこうなってしまったと…
「あと…間違って変な…
　くしゅりのんじゃたぁ…／／」
　さらに続けて

「んなんか…からだほてちゃてぇらめなの…／／」
呂律が回らなくなってきている…
このままだと流石に
まずいので離れようとした時だった
何か固いものに触れる。
『カチカチ…』
何か押し上げてしまったようだ。
「リモコン…？」
先には紐がついていて…先には…
「いやぁあああああああああ
あいしゅうううううやあああああ!!」
「あ（悟り）」
丁度マリアの下半身側にいた私は、
マリアの絶頂とともに吹き出した液体を
まともに顔にかぶったのである。

続く

ユメセカイ

その豊満な肉体から
解き放たれた水飛沫は、
私の鼻腔を擽り、その匂い…
いや、その雰囲気…これも違う。
そう、”この状況”が私を甘美の世界、
『イケナイコトをする世界』へと誘った。
「はぁ…ん…あっ…はぁ…」
マリアは絶頂の余韻と疲労で
目を閉じ息を荒くする。
一方私はマリアの潮を直に
顔面へ噴射され、放心していた。
しかしこのまま黙っていたら
びしょびしょのシーツの上に
寝ているマリアに悪いし、
私も服がべとべとになってしまった。
このままではお互い風邪…
あ、マリアは既に風邪だった（困惑）
「と、とりあえずシーツとか、変えよ？」
咄嗟に出てきたのはこの言葉だった。
とりあえずって…
私がこの先を望んでるみたいじゃないか…
その時、自分の下半身に違和感を感じる。
”下着が擦れただけ”
あくまでそれだけなのに感じている。
脚に力が入らずベットに倒れこむ。
「あっ…」
神様の悪戯なのか…
私の手がたどり着いたのは
マリアの大きい胸だった。

「んっ／／／」
急に触られ感じたのか甘い声を出す。
その声に私の恥部は興奮し
濡れていく…それが見なくても感じられた。
「ーーーー!?」
心臓がぎゅーっと締め付けられる。
”触りたい”
”触って欲しい”
”マリアの前で絶頂したい”
”マリアに私のことを見て欲しい”
そんな思考が頭を侵食する。
イケナイことだと知ってるのに。

私、こんな変態だったんだ…
突然スイッチが入った私は下着を脱いだ。
…糸がすっと引いた。
マリアもうるっとした目でわたしを見つめる
興奮が止まらない。
「ごめんね…マリア…ちゃん…」

私は
マリアの体を
貪り始めた。

「アイスちゃん?
どしたのアイスちゃん?／／／」
いきなりのことにマリアも驚く。
なんてったってこの私が、
このアイスが、冷静沈着で、
絶対間違いを犯さない、この私が
…今大きな過ちを犯しているんだから。

マリアの躰をゆっくり舐めていく。
ほんのり汗の味と、大人びた匂いが
私をさらに熱くさせる。
もっと、もっと、もっと…
「ひゃあ／／／
…アイスぅ…そこ…だめぇっ…／／／」
恥部を容赦なく責める。
溢れる液体の音で
室内を快楽の渦へ変えていく。
…もう抑えられない。
自分の衝動に抑えきれない私は、
マリアの唇を貪り始める。
さっきのマリアとは別人のように
舌を絡ませると口の中で暴れ逃げようとする。
唾液が漏れでる。ベットへ溢れる程に。
私の興奮は収まらない。
「マリア…ふふっ…かーわいい…」
マリアの躰を堪能する。
マリアは少し抵抗する。
それでも私は行為を続ける。
「アイスぅ…熱あがっちゃう…
もうらめぇ……」
マリアが苦しそうな声をあげた。
ハッと我にかえる
「あっ…マリア…マリアごめん！」
すぐさま体を退けて、
裸のマリアを抱えソファへ。
「とりあえずお布団かけるね…」
顔がお互い真っ赤になる。
私は、尚更。
”マリアの躰に夢中だったのだから”

そして自分の恥部から
未だに糸を引いてるのを思い出す。
「…っ／／／／／／／」
とても弄りたくなる衝動を抑えて
服を着た。下着はびちょびちょだった。
「アイス…ごめんね…来る前に
棚の薬飲んだら火照っちゃって…」
突然マリアが謝罪する。
ってか火照る薬って…
「その薬って…何か分かる？」
マリアは頬をさらに赤らめ…
「　自　主　規　制　」

マリアの持ち物に錠剤が入った箱と
飲むタイプのアレ。
さらに愛用してるのか知らないけど…
お…おもちゃがあった……。
マリアは落ち着きを取り戻し、
市販薬を飲ませ数時間で熱が下がった。
一方私だが、風邪を移されることはなかった
…が、とんでもない失態を犯した。
マリアの口…ってか唾液にアレが混ざっていて
……うん。

マリアが横ですやすや眠っている。
その寝顔を見てドキッとする。
これは薬のせいだ！
そう私自身に言い聞かせたが

体は正直だ。
熱が下がってぐっすり眠ってるマリアの横で
「んっ…はぁ…／／／」
夢の中へ堕ちたマリアの側で
「いっ……いくぅ……／／／／」
私は…
「ーーーっっっっっ!!!」
私は淫らな女だよ、ホント。

続く

氷のように冷たくて

マリアとの一件から数日。
お互い顔を合わせられずにいた。
「なんて声をかければいいんだろ…」
そればっかり考えていて業務も
まともに出来なかった。
気分転換にチームルームのＢＡＲで一息いれよう。
混乱した頭を癒しにチームルームへ向かった。
「あっ…」
「あっ、アイスさん」
ＢＡＲに着くとノエルが一服していた。
私を見るとペンダントらしき物を
胸にしまう。
「どうしたのかしら？
疲れでも溜まった？」
心配そうな顔をして覗いてくる。
大人びた…何か秘めてる瞳で。
「ええ…まぁちょっと…」
曇らせて喋る私の言葉には淀みがあり、
意味深にきこえてしまったのかも知れない。
「ふーん…」
ノエルは軽く頷き珈琲を啜った。
私も出来立ての珈琲をゆっくり味わう。
その時不意にノエルが口を開く
「もしかして彼氏でも出来た？」
「ブフォゥｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」
熱い珈琲を吹き出す私。
「あーごめん。違うか。」
「なっなんてこと言うんですかっ!?」
多分…いや、あながち間違ってはいないから

驚いてしまった。
「違うならいいよ。
最近1人で居るときニヤニヤ
してたからさ、てっきり。」
「わっわたしそんな顔してました!?／／／／」
めっちゃ恥ずかしい。
自分の頬を触るとめっちゃ熱い。
多分真っ赤なんだろうなぁ…
「してたよ。
…可愛いからいいのよ?」
なにいってんだこのマスターは
…少し照れながら返す。
「ど、…どうも。」
そのまま無言の時間が過ぎ
互いに何も喋らなくなる。
恥ずかしさが限界に達し
冷めた珈琲を一気に飲み
その場を後にしようとした。
「先戻ります!」
席を立ったとき不意に腕を捕まれる。
ノエルがゆっくりと立ち上がり、
「…気を付けてね」
それだけ言って手を離すと
ログアウト（オラクル系から帝都へ帰還）した。

一体何の事なんだろうか?
疑問だが聞き返すことは出来なかった。
「私も帰るか…、もう集中出来ないし。」
私は片付けを済ませ、
チームルームのロックをかけようとした。
コツンと足に何かが当たる。

「…お？」
拾い上げるとそれは
「懐中時計…？」
綺麗な薔薇の紋章が入った時計。
「…？」
裏に何か掘ってある。
「C．」
C…イニシャルだろうか？
「でもまぁ、チームルームにあるんだし
誰かのだろ、預かっておこ。」
そう独りで呟くと
ポーチにその時計をしまった。
～♪♪
不意に発信タグの通知音が鳴り響く。
「マリアから…？」
先日あんなことがあったのに…
普通なら恥ずかしくて話せないよ。
…やっぱ年上なだけあるな…
感心しつつ電話に出ると
「もしもし…アイス？」
今にも潰れそうな声
「ど、どうしたのマリア
…ってそうじゃないね。
この前はごめん…」
本心を素直に伝える。悪いのは私だ。
「あ、いや、あのね…
その事で伝えたい事があるの…」
いつものマリアとは別人のように
真剣に話してるのが伝わる。
「ん、わかった。
じゃあ明日チームルームで。」

「……」
突然マリアが黙りこむ。
「どうしたの？」
すると何でもなかったかのように
「…わかった！待ってるね！」
そう交わして電話を切った。
「…なんか言いたげだったような。」
そう感じたがあまり気に止めなかった。

次の日の事だった。
アークス船団に全てのアークスが立ち入り禁止のニュースが流れる。
情報は未開示…らしい
…とまぁおかしな通達が届いたのだ。
その内容を受け
マリアとチームルームで集まる予定だったが
急遽、私の家に来ることになった。
「お邪魔…します…」
遠慮して上がるマリア。
「いやいや、遠慮しなくていいから…」
二人共々気まずい空気が流れる。
「それにしても辺な命令だね。
アークス船団に立ち入り禁止なんて」
マリアが怪訝そうな顔をする。
「そうだね…なんかあったのかな…」
私は珈琲を淹れる。
…あの日のように。
ピンポーン

家のチャイムがなる。
「誰だろ…？」

この数時間後の事だった。
クラウンドロップは事実上
その”機能”を停止した。

アークス全体の避難警告が出され
全てのアークスと市民が第４帝都に避難した。
無論、私も。

さらにだ、ノエルが行方不明となったのだ。
メアとしえるも行方不明になった。

私の周りで歯車が少しずつ崩れ
そして凍っていく。
溶けることない結晶となって。

そして今、私は自分の家で大粒の涙を溢している。
目の前で大事な友人が血飛沫を撒き散らし
ゆっくり倒れていく。
「あ…そんな…」
まだ話してないのに
「あ…い……す…」

まだ…

「マリアっ!!!!」

目の前に煌めくのは赤い瞳をした…

私のよく知る、女の子。

続く